

2021年度

入学試験問題  
(A日程午後)

国語

注意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/6から6/6まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らん<sup>らん</sup>に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」<sup>しゅうりょう</sup>の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

雲雀丘学園中学校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ほとんどの日本人が「自然が好きだ」「自然にひかれる」と、言います。しかし、「なぜ好きなの」「なぜひかれるの」と尋ねられたら、「そんなこと、あたりまえで、原因を考えたことはない」と答える人が圧倒的に多数です。まして、「あなたにとって、自然とは何なのですか」と質問されたら、戸惑いますよね。じつは私もそうでした。

この本は、その答えを書いた本です。もちろん答えは、私の答えであって、みなさんに通用するかどうかはわかりません。しかし、たぶん相当部分は通用するでしょう。なぜなら、誰も本気で考えたことがないにもかかわらず、自分なりの答えは心の中に持っているからです。それを引き出して表現してみることがなかっただけのことです。そこで、私は考えたきっかけや過程や筋道も語るつもりです。そこで、みなさんも「私もそう感じる」「そうかな？」と、自分の感覚や心情に照らし合わせて、自分なりに考えてみてください。

「でもね、自然は感じるものであって、考えるものではないでしょう」という反論もあるでしょう。私もつい同意してしまいそうになりますが、「考えないといけない」事態になっているのです。なぜならそれは「自然が危機に陥っている」ことよりも、「自然を感じる」ことが困難になっていると思うからです。たとえば「今年、赤とんぼを見ましたか」と尋ねると、村の中でも「どうだったかなあ」と答える人が結構います。自然へのまなざしが減って来ているのです。

私は百姓です。百姓という職業は、多くの職業の中でも、自然(生きもの)に対する感性と情愛がないと成り立たない職業です。否応なしに、自然と向き合い、つきあい、その体験を蓄積してしまいうるものです。したがって、「百姓なら自然のことはよくわかっているでしょう」と言われますが、そう言われると困ってしまいます。

百姓は、自然(生きもの)には毎日目を向けますが、それでおしまいです。「自然とは何か」などと問い、それに答えを見つけようとは思いません。なぜなら、自然を見つめている自分を、さらに外側から眺めるもう一人の自分がいないと無理だからです。

これは科学的な方法によく似ています。科学は自然を突き放して対象として、外側から分析するからです。したがって、科学は客観的で普遍的な部分の、誰もが納得できる説明には向いています。私たちの個人的な経験や情愛を切り捨ててしまいます。たとえばこういうことです。ある学者が、私が草刈りをしている様子をしばらく見ていて、私に声をかけて来ました。「百姓仕事は単純作業の連続ですね。大変でしょう」と。私は驚いて、あつげにとられました。外側から見ればそう見えるのかもしれない。しかし、私は草の名前を呼びながら、草と会話しながら、楽しいひとときを過ごしていたのです。これは、私の内からのまなざしです。

外からのまなざしはすぐに言葉にできます。ところが内からのまなざしは、人に語ることはあまりありません。私たちは物事を外から客観的に見るよりも、内からのまなざしで見たり感じたりする方が多いものです。とくに百姓仕事はそうです。

ところが百姓もずいぶん変わりました。先日六〇歳ぐらいの百姓が「太鼓打ちを三〇年ぶりに見た」と驚いていました。三〇年ぶりに太鼓打ちという水生昆虫が復活したというのではないのです。「オレは三〇年間、何を見て来たんだろう」と彼はため息をついていました。忙しくて、まなざしが自然から遠ざかっていたのです。時代が変わって来たからです。それにもかかわらず彼に、失った三〇年間を振り返らせる力が、その自然(太鼓打ち)にはあったことに、私は感動しました。彼の身体の中に、内からのまなざしがよみがえったのです。

自然を外から、科学的に見ることも大切ですが、自分の思い出(体験)を呼び起こしながら、内からのまなざしで見ることでも大切です。私はこの本で、自然を内からと外からと、行ったり来たりしながら、見つめて考えます。なぜなら、この二つのまなざしでは、見え方が全然違うからです。そしてこの二つをつきあわせることによつて、考えが深まるからです。(中略1)

若い頃には、都会の中にはちゃんとした自然はないと思っていました。たとえば悪いのですが、田舎の藪みたいな、それも貧相な自然しかないだろうと、正直思っていました。友人から「都会にも自然はあります。街路樹の根元に咲く野の花はいいものですよ」と言われて、驚きました。それから、都会に行つて、街の中を歩くときは、道端の草に目をやるようになりました。田舎と同じ草もいっぱい生えています。

II、都会に住んでいる人も散歩のときや、通学・通勤の途中で、ふと道端の野の花に目をとめているのですね。III 名前を覚えていくのでしようね。もつとも、急いでいるときは、気づかないで通り過ぎてしまうのは、田舎でも都会でも同じです。自然とは、いったい何なのでしょう。どうも、「自然は大切だ。自然は破壊してはいけない」と言うときの自然とはちがう自然が身の回りには、あたりまえにあふれています。

これが私たちの日常です。でもなぜ、私たちはふと野の花に目をとめるのでしょうか。なぜ、意識せずにまなざしを向けるのでしょうか(それもかなり個人差があります)。

「きれいだと思うから」という返事が聞こえてくるようですが、そうでしょうか。もつと深い理由がありそうです。村に住んでいると、ある日突然に、蛙の鳴き声が村中に響き渡ります。六月上旬の夜の事です。百姓でない人は「夏が来たな」と感じるでしょう(私は「誰か田植えを始めたな」と思いますが)。蛙のほとんどは田んぼで産卵します。鳴いているのは雄の蛙で、求愛の声なのです。蛙は田んぼが産卵できる状態になるまで鳴かずに待っているのです(代掻き・田植えが終わると、田んぼの水は温まり、干上がるのがなくなり、餌の藻類が一斉に発生し、卵からお玉杓子が生まれ育つための条件が整うからです)。

しかし私たちは「代掻きと田植えが引き金になって、蛙が鳴き始めたんだ」と因果関係を意識することなく、蛙が鳴き始めるのは毎年くり返される「自然な現象」であつて、「いよいよ本格的な夏が来た」と蛙の鳴く声という自然に季節を感じるのです。

赤とんぼが急に飛び始めるのは、田植えをして四五日過ぎた頃です。日本で生まれる赤とんぼのほとんどは田んぼで生まれます。しかし、赤とんぼが群れ飛ぶ夏空や秋空は「自然な現象」であつて、この赤とんぼはどこで生まれたのだろうか、と考えることはありません。まして、田植えをして四五日過ぎたから、そろそろ赤とんぼが飛び始める頃だ、などと待ちかまえることもありません。近年、東日本では赤とんぼ(秋茜)が激減しています。「少なくなった」と気づく人もいますが、「なぜ少なくなったのだろうか」と考える人は、百姓にもあまりいません。どうも身近な自然というのは、ことさらに意識して、移ろいの原因を突きとめようとするようなものではありません。自然に、あるがままでいいのです。(中略2)

晴れた日の夏の夕暮れともなると、田んぼの稲のすべての葉先に、水滴が現れます。それが夕日に反射してきらきら輝いている風景はまるで星空を眺めているのかと錯覚するぐらいで、見とれてしまいます。しかし、昼間はさらに多量の水分が葉先から蒸散しますが、

すぐに空気中に消えていくので、人間の目には見えません。夕方になると空気が水分を抱え込むことができなくなり、水滴として葉先に溜まってしまいうから見えるのです。

しかし、私たち百姓も「そうか、この水滴が昼間は蒸散して、風を冷やしているのか」などと考えません。こうした科学的な説明は、涼しい風に身をまかせている気持ちや稲の葉先の露を星空に見立てている感性を台なしにしています。無粋な、出過ぎた、**IV** 説明だ、と感じるのです。

このように私たちは四季折々の様々な自然に目をとめ、それを「自然な現象」として、満喫しています。生きものに目を向けることは気持ちのいいものです。しかし、その出現の原因を問い詰めたりはしません。そんな意識が持ち上がったら、自然は楽しむことができませぬ。自然は、自然なままに感じて身を任せて、離れるとすぐに忘れていくものです。

(宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』)

\*普遍的：すべてのものに共通するさま。

\*太鼓打ち：カメムシ目タイコウチ科の水生昆虫。

\*代掻き：田植えの前に水田に水を入れ、土をならす作業。

\*満喫：十分に満足するほど味わうこと。

問一 ——線部①「まして、『あなたにとつて、自然とは何なのですか』と質問されたら、戸惑いますよね」とありますが、筆者はなぜこのように述べているのですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自然にひかれる人が圧倒的に多いなかで、自然そのものの意味を考える人などいないから。

イ 自然にひかれる原因すら考えたこともないのに、自然そのものの意味など答えられないから。

ウ 自然にひかれるのは日本人ならあたりまえだが、その原因を一つに定めることはできないから。

エ 自然にひかれる原因を誰もと考えているはずなのに、その考えを表現しようとはしないから。

問二 ——線部②『考えないといけない』事態になっている」とありますが、それはどのような事態ですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自然について真剣に考えることが減り、自然が危機に陥っている事態。

イ 赤とんぼを探すが減り、自然を身近に感じられなくなっている事態。

ウ 身近な生きものを気にすることが減り、自然から遠ざかっている事態。

エ 田舎から赤とんぼが減り、自然に魅力を感じられなくなっている事態。

問三 ——線部③「そう言われると困ってしまいます」とありますが、筆者がこう述べる理由を、次のようにまとめました。(a)。(b)にあてはまることばを、(a)は五字、(b)は七字で本文からそれぞれ探し、文を完成させなさい。( )は字数に数えます。

百姓は、自然への(a)をもち合わせ、毎日自然に目を向けはするけれど、そうした自分を(b)ことはしないから。

問四 ——線部④「私は驚いて、あつげにとられました」とありますが、筆者がこのように述べる理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は自然をいとしく感じながら楽しんでいたのに、学者は自然と感情をきりはなして感想を述べたから。

イ 筆者は自然とも会話ができると考えていたのに、学者は科学的な見方では会話ができないと考えたから。

ウ 筆者は誰もが楽しめる作業だと思っていたのに、学者は単純作業の連続で楽しくないと言ったから。

エ 筆者は個人の思い出を大切なものと考えていたのに、学者は個人的な思い出など必要ないとしたから。

問五 ——線部⑤「私は感動しました」とありますが、筆者は何に感動したのですか。それをまとめた次の(a)～(c)にあてはまることばを、(a)は八字、(b)は五字、(c)は七字で本文からそれぞれ探し、文章を完成させなさい。( )は字数に数えます。

百姓は物事を(a)で見たり感じたりしてきたが、時代が変わって、太鼓打ちなどの身近な自然から(b)いた。そんな自然との関わり方を忘れていた百姓に、失った時間を(c)が自然にはあったことに筆者は感動した。

問六 ——線部⑥「この二つをつきあわせることによって、考えが深まる」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自然を客観的に見る視点と感情的に見る視点を交互にもつことで、自然にひかれる理由がはっきりするということ。

イ 自然を科学者として見る視点と百姓として見る視点を対立させることで、人生に深みが増してくるということ。

ウ 自然を科学的に見る視点と体験や感情をもとにして見る視点を比較することで、自然への理解が深まるということ。

(2) 本文の……線部A～Dは「この二つ」の具体例としてあげられています。A～Dを二つに分けるとすると、どのような分け方になりますか。その組み合わせとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア (AC) / (BD) イ (AD) / (BC) ウ (A) / (BCD) エ (B) / (ACD)

問七 **I** ～ **III** にあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア (I…:ところ)が II…:ですから III…:そして) イ (I…:ただし) II…:そして III…:だから)

ウ (I…:だから) II…:です) III…:そして) エ (I…:ところ)が II…:なぜなら III…:だから)

問八 〓線部1「ふと」、2「突然に」は、どのことばにかかりますか。次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 1 ふと、道端の野の花に目をとめているのですね。
- 2 突然に、蛙の鳴き声が村中に響き渡ります。

問九 **IV** にあてはまることばとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 極端な
- イ 無駄な
- ウ 異様な
- エ 完ぺきな

問十 〓線部⑦「私たちは四季折々の様々な自然に目をとめ、それを『自然な現象』として、満喫しています」とありますが、これはどうすることばを指していますか。「意識」ということばを使って、解答らんに続くように四十字以内で答えなさい。

( )、( ) 「」は字数に数えます。

問十一 本文の表現の特徴として適当なものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者の考えだけにかたよることなく、異なる立場の意見も取りあげられている。
- イ 具体的な数値や客観的なデータが多く示されており、内容に説得力が感じられる。
- ウ 「私」と「私たち」を使い分けることで、百姓と百姓以外を明確に区別している。
- エ 問いかけの形を多く用いることで、読者を話題へと引きつける工夫をしている。
- オ 始まる部分に結論が書いてあるので、読者には筆者の主張がとらえやすい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「僕」(松岡清澄)は、刺繍をすることが好きな高校一年生である。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みつつ分の島にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。

宮多たちは、にやんこなんとかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さっきからぜんぜん会話に入れない。課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。もう、相槌すら打てなくなってきた。

祖母の顔を思い出して、懸命に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるようなことなのだから。

「なあ、松岡くんは」

② 宮多の話す声が、途中で聞こえなくなった。ふいに高杉くるみが視界に入ったから。

世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅつと持ち上がった。虚勢を張るわけでもなく、おどおどするでもなく、たまごやきを味わっている。その顔を見た瞬間「ごめん」と口走っていた。

「え」

③ 「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

**I** 口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繍を集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。わかってもらえるわけがない。ほんとうは『明治の刺繍絵画名品集』というぶあつい図録がよかった。残念ながらそちらは貸出禁止になっていたのだ。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなって、こうなって。勝手に指が動く。ふと顔を上げると、近くにいた数名がこっちを見ていた。男女混合の四人グループのうちのひとりが僕の手つきを真似て、くすくす笑っている。

「なに？」

自分で思っていたより、大きな声が出た。他の島の生徒たちが気づいて、こちらに注目しているのがわかった。宮多たちも。でももう、あとには引けない。

「なあ、なんか用？」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのか、ひとりが **II** したように目を見開く。その隣の男子が「は？ なんなん」と頬をひきつらせた。

「いや、なんなん？ そっちこそ」

べつに。なあ。うん。彼らはもごもごと言ひ合ひ、視線を逸らす。教室に、ざわめきが戻る。遠くで交わされるひそやかなささやきや笑い声が、耳たぶをちりつと掠めた。

校門を出たところでキヨくん、と呼ばれた。振り返ったその瞬間に、強い風が吹く。

キヨくん。小学校低学年の頃のままだに、高杉くるみは僕の名を呼ぶ。当時は僕も彼女を「くるみちゃん」と親しげな感じで呼んでいたのだが、学年が上がるにつれて会話の機会が減り、今ではもうどう呼べばいいのかわからない。

(中略)

歩いていると、グラウンドの野球部やサッカー部の声がどんどん遠くなっていく。今日は世界がうつすらと黄色くて、遠くの山がぼやけて見えた。春はいつもそうだ。すべての輪郭があいまいになる。

「あんまり気にせんほうがあええよ。山田くんたちのことは」

「山田って誰？」

僕の手つきを真似て笑っていたのが山田某らしい。

「私らと同じ中学やったで」

「覚えてない」

個性は大事、というようなことを人はよく言うが、学校以上に「個性を尊重すること、伸ばすこと」に向いていない場所は、たぶんない。柴犬の群れに交じったナポリタン・マステイフ。あるいはポメラニアン。集団の中でもはやされる個性なんて、せいぜいその程度なものだ。犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る。

アヒルはアヒルの群れに交じれば見分けがつかなくなる。その程度のめずらしさであっても、学校ではもてあまされる。浮く。くすくす笑いながら仕草を真似される。

「だいじょうぶ。慣れるるし」

⑤ けど、お氣遣いありがとう。そう言っ隣を見たら、くるみはいなかった。数メートル後方でしゃがんでいる。灰色の石をつまみあげて、しげしげと観察しはじめた。

「なにしてんの？」

「うん、石」

うん、石。ぜんぜん答えになってない。入学式の日「石が好き」だと言っていたことはもちろんちゃん覚えていたが、まさか道端の石を拾っているとは思わなかった。

「いつも石拾ってんの？ 帰る時に」

「いつもではないよ。だいたい土日にかがしに行く。河原とか、山に」

「土日？ わざわざ？」

「やすりで磨くの。つるつるのぴかぴかになるまで」

放課後の時間はすべて石の研磨にあてているという。ほんまにきれいななんねんで、と言う頬がすかに上気している。

ポケットから取り出して見せられた石は三角のおにぎりのような形状だった。たしかによく磨かれている。触ってもええよ、と言われて、手を伸ばした。指先で、しばらくすべすべとした感触を楽しむ。

「さっき拾った石も磨くの？」

くるみはすこし考えて、これはたぶん磨かへん、と答えた。

⑥ 「磨かれたくない石もあるから。つるつるのぴかぴかになりたくないってこの石が言うてる」

石には石の意思がある。駄洒落のようなことを真顔で言うが、意味がわからない。

「石の意思、わかんのか？」

「わかりたい、いつも思ってる。それに、ぴかぴかしてないときれいやないってわけでもないやんか。ごつごつのざらざらの石のきれいさってあるから。そこは尊重してやらんとな」

じやあね。その挨拶があまりに唐突でそつげなかつたので、怒ったのかと一瞬焦った。

「キヨくん、まっすぐやる。私、こっちやから」

川沿いの道を一步踏み出してから振り返った。ずんずんと前進していくくるみの後ろ姿は、巨大なリュックが移動しているように見えた。

石を磨くのが楽しいという話も、石の意思という話も、よくわからなかった。わからなくて、おもしろい。わからないことに触れるということ。似たもの同士で「わかるわかる」と言い合うより、そのほうが楽しい。

ポケットの中でスマートフォンが鳴って、宮多からのメッセージが表示された。

「昼、なんか怒ってた？ もしや俺あかんこと言うた？」

違う。声に出して言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、気づいてしまっただけだ。自分が楽しいふりをしてににに。

いつも、ひとりだった。

教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がいらないのは、心もとない。ひとりではぼつんと弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさをこまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もつともつとさびしい。

⑧ 好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。その苦しさに耐える覚悟が、僕にはあるのか。

文字を入力する指がひどく震える。

「ちやうねん。ほんまに本読みたかつただけ。刺繍の本」

ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繍を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。

「こうやって刺繍するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかつた。ごめん」

ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

⑨ 「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」

そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だ

としても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐がほけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がぼしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙がにじむ。

\*ナポリタン・マステイフ、ポメラニアン：犬の品種の名。

(寺地はるな『水を縫う』)

- 問一 ——線部①「もう、相槌すら打てなくなってきた」とありますが、このときの清澄の様子として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア 宮多たちの話が幼稚でつまらないので、話し声が耳に入らない様子。  
イ 宮多たちの話に入ることができないので、投げやりになっている様子。  
ウ 宮多たちの話す内容が理解できず、聞くことをあきらめている様子。  
エ 宮多たちの話す内容に興味がもてず、聞くことをあきらめている様子。
- 問二 ——線部②「世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島」とありますが、これはくるみのどのような状況をたとえて表現したのですか。二十五字以内で説明しなさい。(、。 「」は字数に数えます。)
- 問三 ——線部③「ごめん、俺、見たい本あるから席に戻るわ」とありますが、こう言ったときの清澄の気持ちとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア くるみの姿を目にしたことで、人に合わせずに自分のやりたいことをやろうと思った。  
イ くるみの姿を目にしたことで、宮多をあざむいていた自分はずかしいと思った。  
ウ 宮多から話しかけられたことで、これ以上くだらないゲームの話などできないと思った。  
エ 宮多から話しかけられたことで、無理に調子を合わせていたことを謝らうと思った。
- 問四 

I	II
---	----

 にあてはまる適当なことを次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。  
(同じ記号は二度使えません。)
- ア ぎよつと    イ かちんと    ウ ぞつと    エ やんわりと    オ ぽかんと
- 問五 ——線部④「遠くで交わされるひそやかなさやきや笑い声が、耳たぶをちりつと掠めた」とありますが、ここから清澄のどのような様子が読み取れますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア からかわれた原因は自分にあるとわかっているが、相手が謝るまで許すつもりはないと強がっている様子。  
イ 刺繍のことでからかわれるのは慣れているが、あまりにもしつこい相手に腹が立って仕方がない様子。  
ウ からかわれたことをはずかしいとは感じつつも、宮多たちが助けてくれなかったことに落ちこんでいる様子。  
エ 刺繍が好きなことをからかう人は相手にしたくないと思いつつも、どうしても気になってしまう様子。
- 問六 ——線部⑤「お気遣いありがとう」とありますが、清澄はくるみのどのような気遣いに対してありがとうと言っていると考えられますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア 教室でからかってきたのは中学の同級生だと教えてくれたこと。  
イ 教室でのいざごぎを気に病むことはないと言ってくれたこと。  
ウ 周りを気にせず好きなことをやるべきだと伝えてくれたこと。  
エ 学校では個性を出し過ぎないほうがいいと教えてくれたこと。
- 問七 ——線部⑥「磨かれたくない石もあるから。つるつるのびかびかになりたくないってこの石が言うてる」ということばには、くるみのどのような思いがこめられていますか。「個性」ということばを使って、解答らんんに続くように二十字以内で答えなさい。(、。 「」は字数に数えます。)
- 問八 ——線部⑦「わからなくて、おもしろい」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア くるみの話によく理解できなかったが、わからないなりに聞いてみると、石のことを知りたいと思ったということ。  
イ くるみの話によく理解できなかったが、理解できないからこそ心ひかれるものがあり、楽しいと思えたということ。  
ウ くるみの話がよく理解できなかったが、彼女と自分が似ている気がしたので、もっと聞きたいと思ったということ。  
エ くるみの話がよく理解できなかったが、宮多たちのゲームの話と比べると、まだおもしろいと思えたということ。
- 問九 ——線部⑧「文字を入力する指がひどく震える」とありますが、これはなぜですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア 好きでもないことを好きなふりをしていたことを宮多に打ち明けたいが、どう伝えるべきかわからないから。  
イ 自分にやさしくしてくれる宮多に自分が本当に好きなことを早く伝えたくて、心が落ち着かないから。  
ウ 自分を気にかけてくれる宮多に本当のことを打ち明けたらどう言われるかを思って、緊張しているから。  
エ 好きなことを追求する覚悟がもてていないのに本当のことを宮多に伝えようとして、心が苦しいから。
- 問十 ——線部⑨「そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ」とありますが、ここから清澄のどのような気持ちが読みとれますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア 刺繍が好きなことを誰にもわかってもらえなれないと思ひこんでいたので、宮多のことばにおどろくとともにうれしく思う気持ち。  
イ 刺繍が好きなことを宮多ならわかってくれはるはずだと思っていたが、実際に会って話を聞くまではまだ信じられない気持ち。  
ウ 猫の刺繍の出来にあまり自信がもてないでいたが、宮多からほめられてとまどうとともに少し自信をもてたという気持ち。  
エ 宮多からの返信があまりにも早くそっけないので、自分の言いたいことを理解してくれていないのかと疑う気持ち。
- 問十一 「高杉くるみ」に関する表現の説明として正しいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
- ア ……線部A「灰色の石をつまみあげて、しげしげと観察しはじめた」には、社交性がなく、ひとりを好む傾向が表れている。  
イ ……線部B「頬がかすかに上気している」には、好きなことに熱中するあまり、気持ちを押しつけがちな性格が表れている。  
ウ ……線部C「じゃあね。その挨拶があまりに唐突でそっけなかった」には、言いたいことだけを言う、身勝手さが表れている。  
エ ……線部D「ずんずんと前進していくくるみの後ろ姿」には、人の目を気にすることなく、まっすぐ生きる姿勢が表れている。

問十二 本文の表現について三人の生徒と先生が話しています。それを読んで、あとの(1)・(2)に答えなさい。

Aさん 最後の場面が、私には印象的でした。「波紋が幾重にも広がる」という表現は、清澄の心情に関係していると思います。

先生 よいところに目をつけましたね。その表現が意味することは何でしょうか。

Aさん 波紋は  I  によって生じたもので、それが広がるということは、今回のことが清澄の心に大きな影響を与えたことを意味していると思います。

先生 そうですね。他に気になった表現はありますか。

Bさん 私は「太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ」という表現が気になりました。水面がきらきらしている様子は  II  を感じさせます。

Aさん 清澄はクラスメイトとの関わりでなかで、自分を認めることができたんですね。

Cさん 「風」と言えば、私は清澄がくるみに声をかけられる場面の  III  「 III  」という一文も気になります。この表現には、清澄が変わっていくことのきざしが感じられます。

先生 清澄が宮多に本心を打ち明ける場面へとつながっていますね。

(1)  I  ・  II  にあてはまることばの組み合わせとして、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア (I：クラスメイトとの関係) II：過去の自分との決別)

イ (I：宮多がかけてくれた言葉) II：生きることへの希望)

ウ (I：うまくいかない人間関係) II：清澄の宮多への期待)

エ (I：好きなことを続ける覚悟) II：刺繍への更なる熱意)

(2)  III  にあてはまる一文を本文から探し、始めの五字を書きぬきなさい。(、。。「」は字数に数えます。)

三 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、必要な場合はひらがなで送りがなも書きなさい。

1 ジュンジョ立ってて説明する。

2 長年のコウセキをたたえる。

3 運命に身をユダネル。

4 王のゴエイを務める。

5 世界平和をトナエル。

6 まきをタバにしかつぐ。

7 犯人のケンキョに協力する。

8 決意をカタメル。

9 ヨダンを許さない状況。

10 身勝手でオウボウなふるまい。

問一

問二

問三 a

b

問四

問五 a

b

c

問六 (1)

(2)

問七

問十

問八 1

2

問九

問十一

問一

問二

問七

という思い。

身の回りの自然に対して、

よ。

問三

問四 I

II

問五

問六

問八

問九

問十

問十一

問十二 (1)

(2)

9	ヨダン	5	トナエル	1	ジュンジョ
10	オウボウ	6	タバ	2	コウセキ
		7	ケンキョ	3	ユダネル
		8	カタメル	4	ゴエイ

受験番号
得点

三



問一  
イ  
問二  
ウ

問三  
a 感性と情愛  
b 外側から眺める  
問四  
ア

問五  
a 内からのまなざし  
b 遠ざかって

c 振り返らせる力

問六  
(1) ウ  
(2) イ  
問七  
ア  
問十

問八  
1 エ  
2 エ  
問九  
イ

問十一  
ア  
エ  
(順不同)

問一  
ウ

て	ま	識	を	身の回りの自然に対して、
楽	ま	を	問	
し	に	も	い	
む	感	た	話	
	じ	ず	め	
こと。	て	に	る	出
	身	、	よ	現
	を	自	う	の
	任	然	な	原
	せ	な	意	因

問二  
周 囲 が グ ル  
な か 、 た っ た プ で い る  
る 状 況 。

問三  
ア  
問四  
I オ  
II ア

問五  
エ  
問六  
イ

問七  
石 の 意 思 を 感 じ と っ て  
、 個 性 を 尊 重 し た い  
という思い。

問八  
イ  
問九  
ウ  
問十  
ア

問十一  
エ

問十二  
(1) イ  
(2) 振  
り  
返  
っ  
た

1 ジュンジョ	順序	5 トナエル	唱える	9 ヨダン	予断
2 コウセキ	功績	6 タバ	束	10 オウボウ	横暴
3 ユダネル	委ねる	7 ケンキョ	検挙		
4 ゴエイ	護衛	8 カタメル	固める		

三